

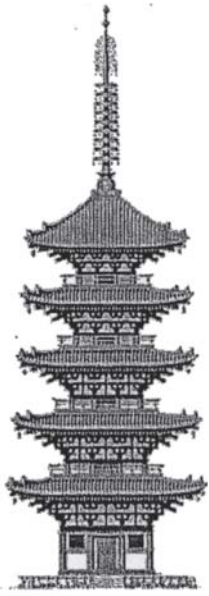
弘法さんかわら版

発行編集部

大塚耕平事務所

☎052-757-1955

Kouhei@oh-kouhei.org



皆さん、こんにちは。朝晩は冷え込むようになりまし。お釈迦様の生涯をお伝えしている今年のかわら版。今月は**第一結集**(だいいちけちじゅう)です。

★八つの仏舎利塔

お釈迦様入滅後、弟子たちは在家信者とともに葬儀を行い、ご遺体を荼毘にふしました。なかなか燃えなかつたそうです。七日後、教団の後継者と目された**マハーカーシャパ**が到着。それを待っていたかのように火がつかしました。火葬が終わると遺骨を巡って問題が発生。お釈迦様と縁の深い**八部族**がそれぞれ遺骨の持ち帰ることを主張して一触即発の状況となりました。この時、**ドローナ**という弟子が「お釈迦様は耐え忍び、譲り合い、争わないことを教えてく

れたはず。遺骨は平等に分けましよう」と提案。八部族で分骨し、それぞれ遺骨を安置する**卒塔婆(ストウパー)**を建てました。ちなみに遺骨のことは原語で**シャリーラ**。中国では**舍利**と表記されたため、卒塔婆は**仏舍利**塔とも言われます。余談ですが、お寿司屋さんの**シャリ**はご飯の見た目が舍利に似ていることから由来した用語です。

★アショーカ王と日泰寺

お釈迦様が入滅して約百五十年後、インドは**マウリヤ朝**の**アショーカ王**によって統一されました。アショーカ王はインド統一の過程で体験した悲惨な戦争への反省もあって仏教に傾倒。信仰の対象となっていた**仏舎利**を**八万四千**の塔に祀り直したと言われています。そのうちのひとつの塔を、**八九年**、北インドの**ピプラー**でイギリス人**ウィリアム・ペップ**が発掘。塔からは「シャークヤムニの

遺骨」と記された壺が出土。この壺の中にあつた**仏舎利**がインドから**タイ王室**、そして日本に渡り、**覚王山日泰寺**に祀られました。その経緯は過去のかわら版でお伝えしたとおりです。



日泰寺仏舎利奉安塔

★第一結集(だいいちけちじゅう)

ところで、お釈迦様入滅後の教団はどうなったのでしょうか。お釈迦様は弟子の個性に合わせて**対機説法(応病与薬、臨機応変)**を行つたため、体系的な記録は一切残さず、その教えは全て**口伝(くでん)**でした。マハーカーシャパは「口伝の内容を記録して後世に伝えないと教えが廃れる」と危機感を抱いたそうです。そこで、マガダ国の**ラージャグリハ**にある**七葉窟(しちようくつ)**にお釈迦様の**高弟五百人**

を集め、經典の編纂会議を開催。これを**第一結集**と言います。悟りを開いた高弟のことを**阿羅漢**と言います。日本のお寺によく祀られている**五百羅漢**はこの第一結集に由来します。

★三蔵(さんざう)

經典の最初が「**如是我聞**」に**よぜがもん**」から始まるのは「私はお釈迦様からこのように聞いた」という意味であり、口伝を編纂した名残です。お釈迦様の侍者**アーナンダ**は教えを一番たくさん聞いていたことから**多聞第一(たもんだいいち)**と呼ばれ「**経**」の編纂に貢献しました。戒律を守る修行に打ち込んだ**ウパーリ**は**持律第一(じりつだいいち)**と呼ばれ、お釈迦様の定めた規則、すなわち「**律**」の整理に寄与しました。そして教えの内容は理論的に体系化され「**論**」が蓄積されていきます。こうして、「**経**」「**律**」「**論**」の「**三蔵**」が成立しました。

★第二結集(だいにけちじゅう)

今日の仏教との接点を探るために、来月は**第二結集**をお伝えします。乞ご期待。

